

## 言語をもたない動物が信念をもつことはできるか？

中谷内悠

### 序論

本稿では、言語をもたない動物が信念をもつことができるかという問題に取り組む。まず、ある信念をもつためには、その信念に含まれる概念をもつことが必要であると考えられるだろう。例えば「カエデの木の上に猫がいる」と信じることができるひとは、「カエデ」や「猫」などの、信念の内容に含まれる概念を理解しているように思われる。それゆえ、言語をもたない動物が信念をもつことができるかという問題は、言語をもたない動物が概念をもつことができるかという問題に行き着く。デイヴィッドソンのような言語主義者は、言語使用者だけが概念をもつことができると考える。それゆえ言語をもたない動物が信念をもつことを否定する。一方、非言語主義者のグロックは、類人猿についての行動学的な知見をもとに、非言語主義を支持する。本稿ではこれらの議論を整理した後に、グロックの主張の妥当性について検討し、彼の考えの中から、非言語主義を擁護するために重要な考えを抽出することを目的とする。

まずは1節で、言語をもたない動物は信念をもつことができないというデイヴィッドソンの主張が、言語をもたない動物は概念をもつことができないという考えに依拠しているということを明らかにする。2節では、概念をもつためには、分類の能力が必要だという考えを整理する。その考えをもとにデイヴィッドソンは言語使用者だけが分類することができると主張する。グロックは、概念をもつために分類の能力が必要であるという点ではデイヴィッドソンに同意するが、しかし言語使用者だけに分類する能力を認めるというデイヴィッドソンの主張には反対する。彼は、デイヴィッドソンが出した論証を否定するだけでなく、言語を使用しない動物が分類する能力をもつことを積極的に示そうとする。3節では、グロックのこれらの考えをみる。そして最後に4節で、グロックの主張の妥当性について検討する。私の考えでは、グロックは言語主義者であるデイヴィッドソンの論証を否定することには成功している。その点で彼の議論は、非言語主義を擁護するために重要なものといえる。ただし、言語を使用しない動物が分類する能力をもつということを示そうとする議論に関しては、あまりうまくいっていないように思われる。結果として、言語をもたない動物は、概念をもたず、それゆえ信念をもたないというデイヴィッドソンの主張に、グロックは適切な批判を加えたことになるが、しかし言語をもたない動物が信念をもつことができるという主張を、積極的に

支持するような論拠を示すことには失敗したということになる。これらのことを明らかにする。

### 1 節 言語をもたない動物は信念をもつことができないという考え

まずは、言語をもたない動物は信念をもつことができないということを支持するデイヴィッドソンの議論をみていく (Davidson, 1982, p.96-98)。彼の議論は、言語をもたない動物は概念をもつことができないという考えに依拠していることを確認する。

さて、私たちは日常的に、犬や猫などの動物が信念をもっているかのような語り方をしている。例えば、マルコムは次のようなエピソードをあげる。

われわれの犬が近所の猫を追いかけているとする。猫はオークの木まで全速力で走り、最後の瞬間に突然向きを変え、近くのカエデの木の上へと姿を消した。犬はこの離れ業を見ておらず、オークの木までやってくると、まるで木によじ登ろうとしているかのように、後ろ足で立ち、前足で木の幹をたたいた。そして、興奮して上の茂みの方に向かって吠えた。この全エピソードを窓越しに観察しているわれわれは「この犬は猫がオークの木の上に登ったと考えている」と言う。(Malcolm 1973, p.13)

私たちは犬についてこのように語るときに、人間の信念について語る時と全く同じことを意味しているのだろうか。また、この語りは比喻ではなくて、私たちは本当に犬に信念を帰属しているのだろうか。デイヴィッドソンは、犬の信念についての語りは、たんに比喻でしかなく、動物に信念を帰属することは間違っていると考える。

まずデイヴィッドソンは、信念文が意味論的不透明性を示すことに注意を向けるなら、動物に信念を帰属することに疑問が生じることになるという。一般的に、信念文は意味論的不透明性を示すと考えられる。つまり、信念文は、信念内容に含まれる語を、等しい外延をもつ語で置き換えた時に、真理値が変わりうるものでなければならない。例えば、マルコムの犬を見た私が、「この犬はこのオークの木に向かって吠えている」と信じているとする。またこのオークの木は、その周辺で一番古い木であり、そのことを私は知らないとしよう。このとき、信念内容に含まれる「このオークの木」という語を、外延が等しい「その周辺で一番古い木」という語で置き換えるなら、信念文「私

はこの犬がその周辺で一番古い木に向かって吠えていると信じている」は偽となる。このように信念文は意味論的不透明性を示す。「この犬はこのオークの木に向かって吠えている」と「この犬がその周辺で一番古い木に向かって吠えている」は、異なる信念内容を表すものとして区別されるのである。

それでは、マルコムは犬はどういったことを信じているといえるだろうか。マルコムは犬についてどのような信念文が成立するといえるか。例えば、「猫がオークの木の上に登った」と信じているのだろうか、それとも「猫がその周辺で一番古い木に登った」と信じているのだろうか、それとも同じ外延をもつまた別の語によって表現される内容を信じているのだろうか。しかし、そもそもこれらの問いは有意味なものではないように思われる。そして、これらの問いが有意味なものではないということは、マルコムは犬の信念について語っているようにみえる文は、意味論的不透明性を示さないものだということになる。そして、信念文は意味論的不透明性を示すのだから、マルコムは犬の信念について語っているようにみえる文は、信念文ではないということになる。つまり、犬が信念をもっているかのように私たちが語るとしても、そのように語ることによって、犬に信念を帰属しているのかどうかは疑わしいとデイヴィッドソンは考えるのである。

これに対しては、次のような応答が可能であるように思われる。「猫がオークの木の上に登ったと犬は信じている」という言表的な信念文が意味論的不透明性を示すということは確かに認められる。しかしながら、信念文には言表的なものだけではなく、「その犬は、あのオークの木に関して、猫はそれに登ったと信じている」といった事象的なものも存在する。そして、事象的な信念文は意味論的不透明性を示さない。それゆえ、犬についての事象的な信念文が成り立つと考えることには問題がなく、犬に信念を帰属することができるかと応答されるかもしれない。

しかしながら、デイヴィッドソンは犬に関する言表的な信念文だけでなく、事象的な信念文が成り立つことも否定する。たしかに、事象的な信念文の場合、問題としている対象に関してどのような記述が適切なものか、つまり、信念主体が受け入れるような対象の記述はどういったものなのか、ということとは問題とならない。しかし、事象的な信念文が成り立つことは、信念主体が受け入れるような記述が存在するということを含意している。というのも、ある主体に信念を帰属することができるなら、その主体は何らかの記述のもとで、その対象を選び出していなければならないから。つまり、もしマルコムは犬がそのような信念をもつことができるのなら、私たちが「オークの木」と呼ぶその対象を、マルコムは犬が何らかの記述のもとで認識しているので

なければならないのである。しかし、犬の信念について語ろうとするときに、どのような記述が適切なのかと問うことはそもそも有意味なことではない。つまり、信念主体が受け入れるような記述が存在するということは疑わしく、ゆえに、事象的な信念文が成り立つことも疑わしいということになる。それゆえ、やはり犬に信念を帰属することはできないとデイヴィドソンは考える。

さて、犬の信念について語ろうとするときに、どのような記述が適切なのかと問うことが有意味ではないのはなぜだろうか。デイヴィドソンによれば、それは、犬が概念をもつことができないためである。ある対象を、例えばオークの木という記述のもとで認識するということは、ある対象をオークの木として認識するということであり、それはつまり、ある対象をオークの木という概念のもとに理解するということである。つまり、オークの木として認識するときには、信念主体はオークの木という概念をもつ。それゆえ、もし犬の信念に関してある記述が適切であるとしたら、犬はその記述に対応する概念をもつことができるのでなければならないということになる。そして、デイヴィドソンによれば、言語使用者のみが概念をもつことができ、言語を使用しない動物が概念をもつことはできない。それゆえ、言語を使用しない動物である犬は概念をもつことができないので、どのような記述が適切なのかと問うことが有意味ではないということになる。以上のように、言語をもたない動物は信念をもつことができないというデイヴィドソンの主張は、言語をもたない動物は概念をもつことができないという考えに依拠している。

## 2 節 言語をもたない動物は概念をもつことができないという考え

一方グロックは、言語をもたない動物は概念をもつことができないというデイヴィドソンの考えに反対する。ただし、グロックの反論をみる前に、言語をもたない動物は概念をもつことができないという考えを支持するためのデイヴィドソンの議論を、まず本節で整理する。また、ある生物が概念をもっているといえるためには、言語能力が必要となるかどうかという点でデイヴィドソンとグロックは考えが異なる。しかし、概念をもつためには、たんにある識別行動をとるような傾向性をもつのではなく、分類する能力をもつこと、そして規範的にふるまうことができるのでなければならないと考える点で、グロックは自身がデイヴィドソンと考えを共有するという。本節ではこの点も確認する。

さて、概念をもつとはどういうことか。ひとつの考えによれば、概念は識別の原理であり、概念をもつことは異なる種類のものを識別する能力をもつことであるというものである(Price, 1953, p.355)。概念をもつことに関する

この考えによれば、動物が概念をもつということは明らかであるように思う。というのも、動物が異なる色、味、音、形、材質、異なる種類の生き物などを区別するような識別行動をとることができるからだ。つまり、概念をもつことに関するこの考えにおいては、概念をもつために言語使用は必要とされない。

しかしながら、デイヴィッドソンは、たんに識別行動を示すだけでは、概念をもっているとはいえないと考える(Davidson,1997,p.24-25)。例えば、植物は二酸化炭素が多い場合に光合成を行い、二酸化炭素が少ない場合には、光合成を行わない。つまり、二酸化炭素の多い場合と少ない場合を区別するような識別行動を示しているといえる。しかし、植物がこれらを区別するような概念をもつとは考えないだろう。また、蝶も同じように赤と緑を区別するような識別行動を示すが、それでも私たちは、蝶が何らかの概念をもつとは考えないだろう。つまり、たんに識別行動の傾向性をもっているにすぎない生物が、概念をもっているとは私たちは考えない。

むしろ、「概念をもつということは、物体や性質や出来事や状況を分類することである。分類済みのものがじつは割り当てられた当のクラスに属していないということがありうるという点を理解しつつ、それらを分類していくことなのである」(Davidson,1997,p.25)。つまり、たんに特定の対象（や状況）に対して、特定の行動を起こすような傾向性をもつことは、概念をもつことではない。その対象を、例えば「赤」というクラスに分類し、なおかつそのときに、じつはその対象が「赤」というクラスには属していないということがありうると理解している場合に、その生物は赤という概念をもつ。蝶は、識別行動を示すが、分類することはない。だから赤の概念をもっていないといえる。

ここで、分類の誤りについてももう少し具体的にみしてみる。例えば、暗闇に動く物体を見てそれが猫だと思っていたが、近づいてみると実際にはそれが狸だったと私が理解するとき、私は分類の誤りを犯していたわけではない。私はたんに見間違いをしていただけだ。一方、「猫」という言葉を最近使いはじめた子供が、近づいてよく見た後も、それでもこれを「猫」と呼ぶような場合、この子供はそもそも猫のクラスにどのような対象が入るかということに正しく理解していなかったといえる。これが分類の誤りにあたる。概念をもつためには、このような意味での誤りの認識が必要とされる。概念をもつことは、このような規範的な側面をもつ。

グロックは概念をもつことに関する以上のデイヴィッドソンの考えに同意する(Glock,2000,p.45-47)。彼も分類できることは、分類の誤りを理解すること

ができることを含むと考える。グロックはこの点について、ウィトゲンシュタイン主義の考えをもとに次のように説明する。ある概念 **F** をもつことは、**F** と **F** でないものを区別するような規則にたんに一致するようにふるまう傾向性をもつことではない。概念 **F** をもつとは、**F** と **F** でないものを区別するような規則に従うことができることである。そして、規則に従うことができるためには、その人が規則を適用することに失敗しうるものでなければならない。そして規則を適用することに失敗しているといわれうるのは、自身がその規則を違反したということを、原理的には認識することができる場合に限られる。そのような可能性を前提としてのみ、その人は自身が従おうとしていた規則からそれたといわれうる。さもないと、ある生物は、たんに予測や統計的な規則からそれたにすぎない。

概念をもっているといえるためには、分類することができなければならない、そして分類することができるためには、誤りを認識することができるのでなければならない。この点でグロックはデイヴィッドソンに同意するという。しかし、デイヴィッドソンはそこからさらに、誤りを認識する能力が、言語使用者にだけ認められると主張する点で、自身の考えとは異なるとグロックはいう。デイヴィッドソンは教えることと、矯正することの区別に注意を向ける。

われわれは、自分たちの見地から、砂や塩を撒き道路の性能を向上させる。またわれわれは、自分たちの見地から、喜びや痛みを引き起こして子供たちを向上させる。どちらの場合でも、その過程は、それだけで、正しい行動と間違った行動の区別を道路や子供に教えたりはしない。行動を矯正することは、それ自体、その行動が間違いであるということを教えることではない(Davidson,1997,p.25)。

そしてグロックによれば、デイヴィッドソンの考えは次のように理解される。私たちは、ある生物が、正しい行動や間違った行動の区別を理解できると考えているときに、その区別を教えて、行動を直してもらおうだろう。一方で、その区別を理解できないと考えているときには、教えるのではなく、たんに条件づけることで行動傾向を矯正する。例えば、畑の野菜を食べるイノシシに対して、私たちは、その野菜が彼らの食べものでないことを教えれば、行動を直してくれるとは考えない。私たちは、電気ショックを与えることで、野菜を食べにこないように矯正するだけだろう。そもそも、ある生物がある

行動を直すことができる場合には、その生物は、その行動をとることもできるし控えることもできるという意味で、意図的に行動できるのでなければならない。前言語的な子供や、イノシシのような言語をもたない生物（や道路のような無生物）が意図的に行為できるとは考えない。それゆえ、言語をもたない生物は、正しい行動や間違った行動の区別を理解できない。それゆえ、分類することができず、したがって概念をもつことができない。

さて、グロックによるデイヴィッドソン理解は次のように整理できる。

1. ある生物が、正しい行動や間違った行動の区別を理解できるならば、私たちはその生物に、その区別を教えて、行動を直してもらうことができる。
2. ある生物が自身の行動を直すことができるならば、その生物はその行動をとることもできるし控えることもできるという意味で、意図的に行動できる。
3. 言語をもたない生物は、意図的に行動することができない。
4. ゆえに、言語をもたない生物は、正しい行動や間違った行動の区別を理解できない。

そして、概念をもつことは、分類することを必要とし、分類することは誤りの認識（すなわち、正しい行動や間違った行動の区別の理解）を必要とするので、言語をもたない動物は概念をもたないということになる。

### 3 節 グロックによる反論

グロックは、言語をもたない動物は概念をもつことができないというデイヴィッドソンの考えに反対する(Glock,2000,p.44-49;Glock,2010,p27-29)。ただし、ひとつ注意として、グロックは、動物が私たちと全く同じ概念をもつと考えているわけではない(Glock,2000,p.44-45)。動物がもつ概念は、私たちの言語的な分類とは、外延的に、または内包的に一致しないかもしれない。例えば、犬は猫とハムスターをひとつのグループにするかもしれない。また黒い猫を他の猫から識別するかもしれない。そして、たとえすべての猫だけをひとつのグループにしたとしても、犬は視覚的にではなく、臭いによってそれを認識しているかもしれない。しかし、このこと自体は、私たちのものとは異なる概念を帰属することの障害とはならないとグロックは想定する。

さて、前節でみたようにデイヴィッドソンは、言語をもたない動物が概念をもたないということを支持する論証を提示した。これに対しグロックは、論

証のステップ3（「言語をもたない生物は、意図的に行動することができない」）を否定するような証拠があることを理由に、デイヴィッドソンの論証が失敗すると考える。また、グロックはデイヴィッドソンの論証を非難するだけではなく、動物が概念をもつという考えを積極的に支持するような議論を行う。

まずは、グロックによるデイヴィッドソンの論証への非難について述べる。グロックは、少なくとも前言語的な子供や類人猿が、実際に意図的に行動することができるというよと考える。というのも、彼らは、異なる方法で目的を追求することによって、またはその目的を捨ててしまうことによって、特定の行動を控えることができるからだ(Byrne,1995,ch. 8-9.)。例えばオマキザルは、チューブの中のピーナッツを取り出すという課題を与えたとき、ピーナッツを押し出すために、さまざまな長さや太さの棒を試行錯誤して使う。また、使うことができる棒の中に、適切な棒がなかった場合には、最終的にピーナッツを取ることをあきらめてしまう。これらの行動はまさに意図的な行動であるといえる。それゆえ、デイヴィッドソンの論証のステップ3が否定され、概念をもつためには言語使用が必要だという言語主義の考えは否定される。

そして次にグロックは、動物が概念をもつという考えを支持するような議論を与える。彼は、言語をもたない動物が分類することができるというよな事実が、実際にあると考える。その事実を説明する前に、グロックはまず、分類することがたんなる傾向性をもつことではないという点について、さらなる説明を加える。彼は、能力をもつことと、傾向性をもつことの区別に注意を向ける。ある生物がたんにある物理運動の傾向性だけをもつ場合、特定の条件がそろったときに自動的にその物理運動が行われる。一方で、ある生物が能力をもつ場合、特定の状況に直面したときに、その能力が自動的に発揮されるわけではない。その生物は、能力を意図的に発揮したり、発揮することを控えることができる。この点で傾向性をもつことと、能力をもつことは異なる。ある生物が分類の能力をもつならば、その生物は意図的にその能力を発揮したり、しなかったりすることができなければならない。分類の能力が必要とするのは、このような意図的な行動である。

そして言語をもたない動物も、分類の能力を意図的に発揮したり、しなかったりすることができる。チンパンジーは、ある状況では異なる種類の対象を意図的に区別し、しかし他の状況では差異を無視することがありうる。例えば、チンパンジーは植物を用いて道具をつくるのだが、あるときは茎についている葉をすべて取り除いて、それをシロアリの巣に指し込むために使う。そしてあるときには、同じ植物を葉のついたままに用いる(Byrne,1995,p.150,



187-9, 225, ch.7)。つまり、チンパンジーは、葉と茎を区別する場合もあれば、その区別を無視する場合もある。これが、チンパンジーが分類する能力をもつと考えるのに十分な証拠だとグロックは考える。それゆえ、言語をもたない生物も分類することができ、つまりは概念をもつことができるということが、この事実から明らかであるとグロックは考える。そして、言語をもたない動物は分類する能力をもつので、概念をもつことができ、それゆえ、言語をもたない動物が信念をもつことができるという考えに問題はないということになる。

#### 4 節 グロックの考えは正しいか？

さて、グロックの主張は正しいだろうか。まず、グロックはデイヴィドソンの論証を否定する議論を行っているが、その議論に問題はなく、この点で非言語主義の擁護に成功しているように思われる。しかしながら、動物が概念をもつという考えを積極的に支持するような議論はあまりうまくいっていないようにみえる。というのも、分類に関するグロックの説明には不整合があるからだ。最後にこの点を明らかにする。

先に見たように、彼は分類についてデイヴィドソンと考えを共有している。ここで言及されている分類とは、ある概念をもっているといえるために必要だといわれるようなものである。ある対象を、例えば「赤」というクラスに分類し、なおかつそのときに、じつはその対象が「赤」というクラスには属していないということがありうると理解している場合に、その生物は赤という概念をもつといわれるのである。また、「分類」に関するデイヴィドソンの考えを、規則に従うことと規則に一致したふるまいの区別のもとで理解する点で、確かに二人の分類に関する理解は同じもののようにはみえる。

一方で、グロックはまた別の部分で、「分類の能力の意図的な発揮」について説明する。あるものが A する能力をもつとき、彼は意図的に A することも、意図的に A することを控えることもできる。そしてチンパンジーは意図的に分類することも、意図的に分類することを控えることもできるので、分類する能力をもっているといえるとグロックはいう。しかしながら、分類する能力に関するこの考えをもちながら、同時に、分類についてのデイヴィドソンと共有する考えをもつことはできないように思われる。というのも、デイヴィドソンと共有する考えに基づくなら、分類の能力は、意図的に発揮したり、発揮することを控えたりするようなものではないからである。グロックが取り上げている事例に即していうと、ある植物の葉っぱをすべて取り除いて使ったり、葉っぱをつけたまま使うことは、意図的に分類の能力を発揮

したり、意図的に分類の能力を発揮することを控えたりすることではない。葉っぱを取り除いて使う場合も、葉っぱをつけたまま使う場合でも、どちらの場合でも私は葉っぱと茎を分類しており、それらを分類する能力をもつのである。分類とは、どのような対象が、葉っぱ（または茎）のクラスに入るのかということを理解することなのである。だから、それは意図的に行われたり控えたりするようなものではない。以上のように、分類に関するグロックの説明には問題があるように思われる。それゆえ、言語をもたない動物が概念をもつという考えを積極的に支持する議論はうまくいっていないように思われる。

グロックの議論は失敗しているが、しかし彼の考えは、言語をもたない動物が概念をもつという考えを正当化する試みのための、ひとつの示唆を与えているように思われる。先ほど述べたように、葉っぱと茎に関わる意図的な識別行動自体は、意図的に分類することではないだろう。しかしながら、仮にチンパンジーの行動を、意図的な識別行動だと解釈することができるなら、そのとき私たちは同時に、そのチンパンジーは葉っぱや茎を分類することができるものとみなしたくなるように思われる。つまり、意図的な識別行動をすることができる主体は、分類することもできると自然に考えたいくなるように思われる。もしこの点について説得的な議論が与えられるならば、グロックが取り上げたチンパンジーの事例と合わせることで、言語をもたない動物が概念をもつという考えを正当化することができる。そして、それによって言語をもたない動物が信念をもつことができるという非言語主義の考えを擁護することができるだろう。

## 結論

言語をもたない動物が信念をもつことができるのかという問題にとって、言語をもたない動物が概念をもつことができるのかという問題が重要なものとなっている。言語をもたない動物が概念をもつことができるのかという問題に対し、言語主義のデイヴィッドソンは否定的に答える。グロックは、類人猿が意図的に行動できるという事実をもとに、デイヴィッドソンの論証を否定することに成功したように思われる。さらに、類人猿に関する事実は、彼らが分類する能力をもち、そして概念をもつことができるということを示すとグロックは考えたが、この主張は説得力をもつものではなかった。概念に関する議論は、そのまま、動物は信念をもつことができるのかという問題につながる。言語をもたない動物は、概念をもたず、それゆえ信念をもたないというデイヴィッドソンの主張に、グロックは適切な批判を加えることで非言語

主義をうまく擁護している。しかしながら、言語をもたない動物が、信念をもつことができるという非言語主義の主張を積極的に支持するような論拠を示すことには失敗していた。

## 文献表

- Byrne, R, 1995, *The Thinking Ape*, Oxford University Press: Oxford.
- Davidson, D, 1982, “Rational Animals”, *Dialectica* 36, 317-27, reprinted in Davidson 2001, 95-105.
- Davidson, D, 1997, “Seeing Through Language”, in J. Preston (ed.), *Thought and Language*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Davidson, D, 2001, *Subjective, Intersubjective, Objective*, Oxford: Oxford University press.
- Glock, H. J, 2000, “Animals, Thought and Concepts”, *Synthese* 123, 35–64,
- Glock, H. J, 2010, “Can Animals Judge?”, *Dialectica* 64, 11-33.
- Malcolm, N, 1973, “Thoughtless Brutes”, *Proceedings and Addresses of the American Philosophical Society* 46, 5-20
- Price, H. H, 1953, *Thinking and Experience*, Hutchinson, London.